

「大正期から昭和初期の阪急・阪神沿線における遊覧書」

田島 栄文（甲子園短期大学）

筆者が在住・在勤する兵庫県西宮市は 2009（平成 21）年 4 月中核市に昇格した。“文教住宅都市を基調とする個性的な都市”の建設を基本目標としてまちづくりを進めてきた本市は、人権・平和・文化・芸術・生涯学習、教育・福祉・保健・医療・防災・防犯、環境・景観・都市整備、学術・観光・産業といった様々な分野で連携・協力しながら一層の発展を図るとともに、物質的な豊かさだけではない、心の豊かさも感じることでできるまちの実現を目指すことをうたっている。

1995（平成 7）年の阪神・淡路大震災の甚大な被害を乗り越え、様々な課題を抱えながらも、本市が阪神都市圏にあって人口増加を続けている理由の一つに、観光・文化・芸術・生涯学習・スポーツ・レクリエーション・野外活動・環境教育などの「余暇生活文化」の充実があるといえよう。本研究は、本市を中心とした阪神地域における「余暇生活文化」を調査し、今後の課題について検討するとともに、地域共同体としての大学や NPO 団体の連携のあり方を探ることを目的とする。そのためにまず大正時代以降急激な発展を遂げた阪急・阪神沿線の遊覧書に関して考察する。

レジャー・アセスメントにおける“コンストレイント調整力”概念の有効性の検討

佐橋 由美〔大阪樟蔭女子大学〕

レジャー研究の先進地、北米におけるレジャー・アセスメント研究の流れの中で、レジャーの文脈において個人が直面する様々なコンストレイント（阻害）要因を類型化し、これらに対する個人の認知のあり方や認知の度合いを研究することは重要な課題と認識されてきた。これまでに開発された最も包括的なアセスメントツール—Leisure Diagnostic Battery—においても、コンストレイント認知の問題は、実際のアセスメント手続き・行為の重要な鍵を握っている。また、コンストレイント研究の先駆である Jackson らの研究グループも、まずは数あるコンストレイント要因の分類と整理から問いを起し、その後、「個人内」「個人間」「構造的」等の代表的要因が、一定の時期に一定の順序性をもって個人のレジャー参加に影響を及ぼしつつ、最終的に参加阻害・機会減少・活動停止へと至らしめる一連のプロセスをコンストレイント階層モデルの形で提示している。このように、従来のコンストレイント研究は、様々なコンストレイント要因をリストアップして類型化した後、個人がそれらのコンストレイントをどれほど重大なものとして認識しているかを測定し、深刻さのレベルを把握すれば、自動的にレジャー参加の抑制、ひいてはレジャーの質の低下を予測できると考えていた。しかし最近では、レジャーの質を左右するのは、コンストレイント認知の大きさではなく、阻害状況を解決するための工夫とその遂行力であると考えられるようになってきた。ある程度のコンストレイントは誰にでも存在しているからである。

本発表では、コンストレイント研究の動向を踏まえた上で、阻害状況を克服するべく打開策を収集・遂行する力、および意気込みを“コンストレイント調整力”という概念で捉え、新たなアセスメントツールの開発と蓄積を目指した重要観点の掘り起こし、項目収集等の予備的検討を行った経過を報告する。